

## 国語科教師教育の実践

### —上越教育大大学院における実践場面研究—

上越教育大学 有沢 俊太郎

#### 1. 「実践場面分析演習」(国語)の性格

現職教員の実態を踏まえて次のようにとらえた。

(ア) 国語科内部の全領域、その周辺領域と連携する総合教科である。(教員養成学部・院の最終ステージにある「ランゲージ・アクロス・ザ・カリキュラム」の例)

(イ) この科目は「カリキュラム・イン・アクション」(カリキュラムと学習活動の連携)の思想に基づくものである。

(ウ) 複数の目標を設定し、複線型のコースを設定する。しかし、相互の連携には十分な注意をはらう。

#### 2. 実践の例

これまでの例は8冊の報告書にまとめてあるが、次に時期を追って概要を示し、教師教育という観点から考察を加える。(今後の方向も示す。)

(ア) 国語学習者研究(昭和59年—平成4年)

教師は日常的に子どもに接しているが、その活動を実証的にとらえ、緩い体系性を形成することによって、「子どもをくみる>心」を養う。

(イ) 研究カンファレンス(平成5—6年)

教師の教育活動は、教師各自の信念、願い、期待などによって遂行される。その強さは、教育活動の原動力となるが、反面で偏狭さを伴う。そこで、ひとつの事実を様々な観点から議論することで、複数の解釈(価値)を発生させる。これは実践学の基礎たる国語教育の事実を確定すると同時に、教師の自己評価を促すことになる。

(ウ) 談話分析法研究(平成6年—現在)

教室談話分析法で、従来の授業分析法ではとらえ切れないものをとらえ、そこに教育的な意義や問題を見ようとする、新しい試みである。「教育研究のための談話分析法」である。教師教育からは、教室におけるコミュニケーション・プロセスの現象を、分析解釈することで、授業を文化的な現象としてとらえなおす機会を提供する。

#### 3. 授業作りのために教師の求められること(国語科の場合)

(ア) 作家研究も大切だが、学習者研究が授業を支える。

(イ) 教師の自己評価が授業を支える。

(ウ) 教師の専門的な知識と技法が授業を支える。

個々のケースに対処することができる基礎的な情報の獲得、整理を目指して、現職教員の生の言葉を基盤に、さまざまな教育方法で実践した。

#### 4. 課題と要望